



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	方法としての神秘：ムージルの『黒つぐみ』について
Author(s)	川東, 雅樹; KAWAHIGASHI, Masaki
Citation	独語独文学科研究年報, 19, 1-10
Issue Date	1993-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25861">https://hdl.handle.net/2115/25861</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P1-10.pdf



# 方法としての神秘

— ムージルの『黒つぐみ』について —

川東雅樹

ムージルの短篇『黒つぐみ』の読者で、不可解な出来事に立ち合ったという印象を否定しきれない者は少なくないだろう。三つのエピソード、つまり深夜にナイチンゲールらしき鳥の訪れを感じたこと、イタリアの戦地で飛箭の飛来で極上の陶酔を味わったこと、そして母の死を機会に戻った故郷で、黒つぐみの言葉とともに幼年時代に回帰していったこと、それらは独立した話としていずれも曖昧なところがなく、イメージはどこまでも鮮やかで、曇りがなく、どちらかといえば、我々が経験する現実以上に心に深く痕跡を残していく。ところがその語るところのものをひとつの意味として捉えようとしたとたんに、途方に暮れてしまうのも事実で、イメージが強すぎると、意味などというようなものはそれに追いつかず、かえって吹き飛んでしまうのかもしれない。物語の背後にはかならず表層の出来事とは別の何かが、意味として、つまりなんらかの価値を付与された、本質とか内実とか呼ばれるようなものが隠されているにちがいないと考えることはもともと幻想にすぎない。しかしそうだとしても、テキストが読まれる、そしてそれがなにがしかの痕跡を読者に残すということは、読み手のコードになんらかの形で移し替えられたということであり、ここに意味が関与しないはずはない。もちろんそうやってなされた解釈や意味付けの当否そのものはさほど重要ではないが、意味がないということだけは読み手にとっては耐えられないものである。このさきテキストがテキストとして生き延びていくためには、解釈され続けられなければならない。

『黒つぐみ』の解釈で先鞭を付けたのがヴィーゼであることはよく知られている。彼は黒つぐみを象徴やアレゴリーではなく表徴として捉え、そこに理解しがたい、形而上的なものという役割を読み取っている。<sup>(1)</sup> 黒つぐみというひとつの記号に課せられた意味を、物語の外部にある概念体系をよりどころとはせずに、物語のなかでの機能に求める姿勢は首肯できるが、結果的にはヴィーゼはこのテキスト全体の解釈を宗教的、神秘主義的な方向に向け、神秘というひとつのイデオロギーに物語を安定させてしまっている。つまりこれをもって最終的な解答ととして、それ以上の追求を認めず、神秘だからではどうなのだというような問いの存在自体を否定しているのである。

虚心にこの物語に向かい合うと、いわゆる外的な事実として書かれていることに不可思議なことはほとんどないがわかる。挙げるとすればせいぜい、第三話で窓辺にやってきた黒つぐみが主人公に分

かる言葉を発したということぐらいだろう。ナイチンゲールの到来も飛箭の飛来も、主人公のA<sub>2</sub>の内面の緊張の中で事件と化したものである。あるいは逆にそのような緊張をもたらしたのがナイチンゲールであり、飛箭であるともいえるかもしれない。いずれが先にあつて、原因を作ったとは判断しようのないことである。この内面の情景に分裂症患者の症例を読み取った評者もいて、それはそれでまったく言われてみればその通りなのかもしれないが、<sup>(2)</sup>しかしA<sub>2</sub>が分裂症だったということと、このテキストからうける物語の面白さの分析とは直接関わりがあるとは思えない。芸術と病気との深層での関係を否定するものではないが、創作者や登場人物の病歴を確認したり、あるいはそのようなものに著しく感応してしまう自分自身の病気を知るために物語を読んでいるのではないからだ。ではどう読むか。たとえば、第一話の舞台となったベルリンの近代的な集合住宅についての、あるいはそこで営まれる画一的かつ管理された空虚な個人生活についてのイローニッシュでしかも気のきいた描写から、ムージルの同時代に対する批判を読み取るのはたやすいことだが、これはこの作家の発言のなかでは特に目新しいものでもないし、この小説の骨格をなすものとしてとりたてて注目するほどの解釈でもない。あるいはまた、ナイチンゲールらしきものが現われたことをきっかけに、主人公が日常的な視点を捨て、慣習と制度で固められた世界から、現実とは異なる、あらゆるものが可能となる、あのムージル自慢の精神の「別の状態」へ移行していく行程とする見方。これはムージルの作品の解釈としては常道であるし、大筋において間違いはないのだろう。しかしこと『黒つぐみ』について言えば、そのような内面の状態を記述して、そこに固有の価値を認めるということでは解消しきれないひっかかりがある。

A<sub>2</sub>の語る三つの挿話のあいだには直接的には因果関係は存在しない。またそのひとつひとつのエピソードについても、その経過の因果を明示するようなところはどこにもない。つまり出奔を誘うナイチンゲール、神の降臨を想起させる飛箭、そして母の化身だと称する黒つぐみ、これらの現象は主人公の異常な精神の昂揚や陶酔、歓喜と必然的なつながりをもっているわけではなく、いわば恣意的な単なる記号でしかない。三つの挿話に共通のものがあるからここに並べられているらしいのだが、その共通のものが何であるのかは暗示すらされておらず、A<sub>2</sub>自身知っているわけでもなく、むしろそれだからこそA<sub>1</sub>に報告しているということになっている。<sup>(3)</sup>それは読者自身が見付けださねばならないものなのか、あるいはそういうものはひょっとして始めから存在しないものなのか、それすらも分からない。物語というのはもともと因果関係である。<sup>(4)</sup>正確に言えば物語が出来事を因果関係に変質させるのである。したがって個々に『黒つぐみ』という物語があり、それを物語として認めるかぎりにはなんらかの因果があるはずである。もちろんここで言う因果関係は、自然科学での証明とは次元の異なるものであつて、物語自体が自らの進むべき方角を定め、それを実現していこうとする法則のことである。物語が単なる情報の伝達を目的とするものではないのだから、このことはまずはじめに確認しておかなければならない。つまり語られている事柄や内容がそれ自身の属する固

有の領域で通用するものとは別の論理が、物語のなかでは働くのである。物語のコードのことである。たとえば象徴などは、物語の外側に独立した体系をあらかじめ確立しており、それが物語の内部に食い込むことによって、もともと存在する意味の組織を物語全体に反映させるものだが、その場合そこに働く因果関係は結局は物語のそれではなく、象徴のものである。したがってそれはここでいう物語のコードとは別のものであり、また実際『黒つぐみ』で象徴という技法が意識的、有効的にはもちいられていることはない。むしろアレゴリーが活用されているかにも見えるのだが、前面にでてくる肝腎のいくつかの形象の間に必然的な結びつきも認められない。三つの挿話をそれぞれ代表する、ナイチンゲール、飛箭そして黒つぐみには、飛行するものだという事、そしてまず響きとして、聴覚的な印象としてA<sub>2</sub>に認知されるという以外に共通項はない。これら一連の現象の背後に特定の概念がはめこまれてもおらず、相互に因果関係は断たれており、物語の要素としても独立しており、互いが互いを説明することはない。厳密にはテキストのなかに現われたものはすべて、テキストという空間を共有する限り、そしてそれが幼児の殴り書きのようなものでない限りは、なんらかのつながりが有るはずなのだが、少なくとも『黒つぐみ』の文脈には、これらの諸現象を関連づけていく論理ははっきりと浮かびあがってこない。現実というものも本来そういうものなのかもしれない。しかし語を選択し、情景を構成し、テキストを編んでいくという行為に、たとえそれが現実の無意味を暴きたてるための技巧であったとしても、意味と連関の存在を無視できないでいる精神のようなものを感じずにはいられないものだ。そうして得られたテキストを形成する論理が真実と呼ばれるか、恣意的だと断定されるかは別の次元の問題である。

形象というのは因果関係のなかに置かれてはじめて意味あるものになるのであって、形象それ自体がはじめから意味をもっているのではない。主人公A<sub>2</sub>の内面と形象はこの小説のなかではそれぞれ関係をもっているのだが、それはあくまでも任意の関係であって、それではなければならないというものではない。つまり記号である。ここでいう関係とはあくまでも三つの物語の中心イメージの、鍵となる形象間の関係である。『黒つぐみ』での形象は常に突然そこに現われる。この突然ということ、コンテキストに依存せず、物語の進展の法則を無視して、それぞれ何の説明もされず、出来事としてはそれぞれが孤立して、意味連関を拒むようにそこに存在すること、これがこの物語の出来事のもつ神秘性を特徴付けるものである。事実を事実として列挙し、目に見える形象としてのみ提示し、決して論理で解きあかさそうとはしない。そのためこの形象は明白には意味をもちえないでいる。何かが隠れているはずと思わざるをえないほどの鮮明な印象と、それが何か分からない苛立ち、読むものを不安に陥れるのはこのためである。

しかしこの意味を拒絶するものは、不可解なもの、表現しがたいものとしての相貌を際立たせてくるほどに、それを命名化し、言語化しようとする欲求を掻き立てる。A<sub>2</sub>の語りの動機もこれと同列に考えて間違いはないが、この欲求がそもそも、語りえないものを語らねばならないという自家撞着に

はまりこんでいるのは自明である。言語芸術にたずさわる者はほとんどこの矛盾律に四苦八苦しているもので、A<sub>2</sub>の行為もそうすると詩人や作家のそれと同じだということになるのだが、よく注意して読めば、A<sub>2</sub>には、たとえばムージルの最初の小説『テルレスの戸惑い』の主人公に見られたような、語りがたいことを前にしての認識の苦しみのようなものはかけらも感じられない。<sup>(5)</sup> A<sub>2</sub>は自らの体験の不思議さを喧伝しない。そればかりかそれが不思議だということも強調しない。したがってそれがなんらかの特別の価値をもつものだと主張することもなく、どちらかといえばこの種の出来事につきまといやすい、安直な神秘主義への熱を冷まそうとしているふしもある。それをA<sub>1</sub>に伝えられないもどかしさを訴えることもない。語りがたいこと、意味として把握できないものに対する姿勢がテルレスとは根本的に違っているのである。

神秘というのは通常の理性的な判断では納得しがたいもののことである。当たり前のことだが、理性的という場合、それは大多数の共通の理解を得られるという意味と受け取れば、神秘にははじめから伝達は拒絶されている。というよりむしろ伝達を阻まれたところにしか成り立たないのが神秘である。それは個人的な内面性という価値を付与されて肯定的に捉えられることにもなったとしても、限定された空間に閉じこめられていることを否定するわけにはいかない。A<sub>2</sub>の神秘体験はつきつめていけば、個人体験のもつ唯一性や伝え難さ、そして孤独に通じるものがある。神秘とは本来だれもが抱え込んでいるのだが、しかしこれが言語化され、社会化され、制度と化していくなかで、共通体験となって密度を失っていく。閉ざされた自我空間で神秘が窒息し、意味を失い、それとともにこの神秘を抱え込んだ自我の存在基盤も危うくならざるをえない。このことを、つまりこの種の体験の陥りやすい安直化と陳腐化を十分意識していたがゆえに、ムージルは『黒つぐみ』では逆に神秘性を弱める仕掛けを随所に持ち込んでいるかにみえる。これが語りの問題である。

この作品について、語りをテーマにしている評者は少なくない。<sup>(6)</sup> 枠物語という形式がいちおう用いられていること、その語り手と実際の語り手であるA<sub>1</sub>ならびにその対話の相手であるA<sub>2</sub>の関係がいまひとつ明確でないこと、またA<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>という呼び名からしてすぐにわかるように、語り手どうしの関係がいわくありげなものとして設定されているなど、いかにも意図的な仕掛けが作者によって施されていることからして頷けることである。しかし語り手の問題に移る前に、まずA<sub>2</sub>の語りの特徴に触れておきたい。たとえばアイブルが指摘するように、A<sub>2</sub>の発言は「ほかならぬ正確さを極めようとするところにくると、著しく不鮮明になり、相互に矛盾する可能性を挙げ、曖昧性に逃避する」<sup>(7)</sup> 傾向は、読んですぐに気づくことだ。このような言語態度をアイブルは「内的なものを外部世界の記号に結びつけようとする、客体化の試み」<sup>(8)</sup> ととる。A<sub>2</sub>の体験した現象がひとつひとつみたとく因果関係がないにもかかわらず、そこに共通する神秘性があるとすれば、その神秘性とは現象にではなく、それを体験する内面のほうにあると考えるのは、この作品を論じる際のひとまずは定説ともいうもので、おおかたの意見はその方向で展開されている。この引用も、内的なものを神秘

と読みかえれば、その一例といえるだろう。あくまでも内的な神秘体験がまず絶対的なものとして先行し、それをいかにして共有化しうるかということなのだ。だがはたしてそうか。A<sub>2</sub> はまず自らの体験の神秘性を懐疑していると受け取るほうが、この場合自然ではないのか。内面の絶対性などなくて、そのため自分自身の体験に潜む不可解なものに積極的に意味を見いだせず、A<sub>1</sub> の検証に無造作に任せようとしているのでないのか。すでに述べた言語態度も語られている内容に対してのものではなく、神秘を語る者の客体性を、つまりA<sub>2</sub> 本人の存在の基盤を理知的かつ反省的な語りのなかで確かなものにしておこうとする姿勢の表われに思われる。そしてこの自己というもの、認識の出発点となる孤独な存在を相対化することで、独善性を排し、神秘への安易な逃避とその行き着く先の自己閉塞を免れようと試みたかにみえる。しかしムージルの懐疑精神の懐の深さをを知っているものにはもちろんこれも偽装にもみえる。このような操作にもかかわらず、いやむしろそうだからこそ、逆に言えばなおいっそう否定しがたい不可思議な連関が存在が明らかになり、結果として神秘の度合いが高められることになるのではないか。たとえばA<sub>2</sub> を非現実な領域へ誘うものが、物語の過程において次々と名前を変えていき、物語の過程が命名の、記号化の過程そのものと受け取れるのだが、その際ナイチンゲールに始まり、「奇蹟の鳥」、「天の鳥」と徐々に上昇していく陶酔の極みで、幻想文学や神秘小説あるいはロマンチックな物語の組立という観点からすれば、結局はそれとはもっとも縁遠いところにある、平凡な鳥の黒つぐみに落ちてしまったことなども、同じ技法だと考えられる。日常どこにでもいる鳥が不思議をもたらしたがゆえに、これはまさに不思議だということなのである。いずれにせよ神秘がそのままでは、剥出しでは受け入れがたいという状況認識のもとでムージルが書いていたことは確かである。

A<sub>1</sub> の役割もその手法の延長線上にある。そもそもA<sub>1</sub> という存在は必要なのだろうか。バルトは「物語をじょうずに分析するには、そのテキストに対立するテキスト(contre-texte)を想起する一種のイメージーションが必要である」<sup>(9)</sup> といっている。それにならってA<sub>1</sub> が不在だとして、『黒つぐみ』の構造にいかなる変化が起きるか。まずA<sub>1</sub> とA<sub>2</sub> という、さまざまに読み換え可能な関係が消滅する。それが対立的なものであれ、Aという原存在の任意の在り方を指す交換可能なものであれ、あるいはそんな関係すらも、もともとないような単なる人物の個別性を表わす記号であれ、とにかくA<sub>2</sub> の体験を受けとめつつ、なおかつその解釈に少なからず貢献する関係項が奪われることになる。A<sub>2</sub> の体験の神秘性はA<sub>1</sub> という緩衝帯による相対化の検証を受けずに、直接読者に向けられる。つまりその神秘性のもち得る意義は読者とA<sub>2</sub> との単線的な関係に依存し、いわば読者の現実体験や過去の物語体験次第で、荒唐無稽の神秘譚にも、感動的かつ独善的な信仰告白めいたものになりうるという、作者にとってはきわめて不本意な受容をもたらすやもしれない。

物語全体の語り手についても同様である。全体の語り手、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub> の関係がどういう秩序にあるのかについては議論の別れるところだが、すくなくともそのそれぞれに対して、それぞれの立場から、

一体語り手とは、A<sub>1</sub>とはそしてA<sub>2</sub>とは誰なのかという問いが発せられることは確かである。それ故ここで語られるA<sub>2</sub>の不可解な体験は、それぞれの視点から、さまざまな焦点で見つめられることを要請するのである。異なる光源からの光を受けて、異なる姿を見せるとも言えようし、あるいは幾重もの濾過層を通過して、この出来事の底に潜む、もうこれ以上光を屈折させようもない深淵のようなものが顕わになるかもしれない。とにかく読者は少なくともこの三つの立場のいずれにも身を置いて見ることができる。それがいかなるものかをここに明示することより、肝腎なのはそういう構造上の仕掛けがあるということである。そしてこの仕掛けが『黒つぐみ』のモノローグ化を阻んでいる。

モノローグとは自己の内部で省察であり、もともと『黒つぐみ』はモノローグだとしばしば解釈されてきた。たとえばロートは「A<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>はひとつの自我の鏡像である」として、そこに「みずからを解体していく意識のふたつの極点」、「客観的、批判的、形式的意識と主観的、実存的、非合理的意識」<sup>(10)</sup>を見ており、またパウアーはクロツツの分裂症説を批判しつつ、「A<sub>2</sub>が分裂症なのではなく、むしろ語り手が分裂症であって、その分裂したそれぞれの部分を幼なじみのA<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>が担っている」<sup>(11)</sup>と考えている。いずれにしても大筋において、A<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>が互いに補完し合ってより大きな自我を形成するというこれらの考え方は、合理と非合理、日常と非日常というような対立し合う要素の相互の働きかけの中に、高次の統一体の実現を見ようとする従来のムージル解釈の範疇を越えるものではない。思考のありかたやその方向を硬直から救い、たえずより高いものをめざしていく精神の運動を読み取ろうとするこの解釈は非常に魅惑的ではあるが、そこにはさまざまな矛盾や異質なものを、大いなる自己意識のうちで解消できるとする幻想が横たわっているにすぎない。この自己意識の内部で、たとえそのいくつもの異質なものが、互いが互いをつねに越えていくという無限の運動を繰り返すものであっても、閉塞空間にとらえられていることにはかわりはない。さらにその前に、そのような解釈の論拠となる立体的かつ能動的、創造的な対立がこの二人の間に認められるだろうか。そもそも実際にこの二人は対立しているのだろうか。さらに対立の解消へ導こうとする積極的な対話がそこに観察されるだろうか。もとよりこの二人の間に対話の前提となる共通の理解や交流が存在しているのか、それすらも疑問である。もう一度引用すれば、A<sub>2</sub>は「思い出のつまった袋をぶちまけるように話したのであり」、A<sub>1</sub>の感想を求めることも、A<sub>1</sub>の反応を自らが語る内容に反映しようとする素振りも見せず、ただひたすら自分が語るのを聞くように語るのである。モノローグというなら、たしかにモノローグに違いないが、それはA<sub>2</sub>がA<sub>1</sub>を内なる自己と見立ててなされる、物語の構造上のモノローグではなく、文字どおりA<sub>2</sub>自身のものだと考えるべきである。

こういう状況で、友人がなんと答えるかはたいした問題ではなかった。彼らふたりの会話を、ほとんどモノローグのように語ることもできるのだ。<sup>(12)</sup>

ぼくは何年ものあいだ、自分のことをだれにも話すことがなかった。それにもしそんなことを自分が自分に話すのを聞いたら、正直言って、気味悪いだろうな。(13)

現実にはA<sub>2</sub>の独り語りを思わせ、A<sub>1</sub>をあたかももうひとりの自己とみなすような仕掛けをほどこしながらも、それを拒絶している。A<sub>2</sub>の語ることがA<sub>1</sub>には結局「聞き分けることのできない囁きやざわめき」(14)としてしか伝わらないがゆえに、A<sub>1</sub>はけっしてA<sub>2</sub>省察を助けるモノローグのもうひとりの自分にはなりえないのであり、頑として他者であり続ける。A<sub>1</sub>はここでは、たとえばクライストの『対話のなかで思想が徐々に出来上がっていくこと』というエッセイのなかで示唆されているような、その意図がまったくにもかかわらず、語り手の思考の構築に貢献することになるというふうな役割も果たしてはいない。A<sub>1</sub>はA<sub>2</sub>の体験の価値を否定するわけではなく、もちろん肯定もしない。両者の間にはそれ以前の段階の深い亀裂が走っている。A<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>の間には言われているようなモノローグ的な対話は存在しない。A<sub>1</sub>はA<sub>2</sub>の物語がいつさい浸透しえない障壁のようにその前に立ちはだかっている。A<sub>2</sub>の語りA<sub>1</sub>を相手にいかなる反応も起こさず、その結果その意味するところが不明のまままだとしたら、A<sub>1</sub>は無用の存在ということになる。

岸田秀は次のようなことをいっている。「物は物自体として存在し得るが、意味は意味自体としては存在し得ない。意味が存在する以上、意味を伝える者と、意味を受け取る者が存在しており、両者のあいだにコミュニケーションがあるのでなければならない。意味の存在は、それを了解する他者の存在を予定している。」(15)意味が成立するためには他者がいる。しかしそれはモノローグの内部にいるもうひとりの自分であってはならず、「言語ゲームを共有しない」(16)まったく異質なものでなければならない。逆に言えば、本来のコミュニケーションの成立にはこの異質な者が必要だということである。A<sub>2</sub>は自分が考えているものを知らず、決して自らの体験に意味を与えようとはしない。それを回避しているといってもいい。なんらかの意味を自らが認めて、それを語ることは、本来他者とのコミュニケートを通じて獲得されるはずの意味を、自己の内部での対話、つまりモノローグによって獲得してしまっていることになるのであり、その際対面する他者はこのモノローグの仕組みにあっては、すでに内在化された自らの分身でしかなくなってしまう。このことは同時にそれを語る者が、存在すると信じている意味の根拠を揺すぶり、その欺瞞性を露呈させることになるのである。「黒つぐみ」という現象はA<sub>1</sub>に対して意味をもつことによってはじめてA<sub>2</sub>にも意味をもつ。それだからこそA<sub>1</sub>に伝えられなければならない。A<sub>2</sub>の体験した神秘はそれ自体なんらの必然的な価値を有するものではなく、むしろ神秘的であればあるほど、つまりコミュニケーションの困難があらわになるほど逆説的にA<sub>1</sub>の他者としての相貌を際立たせることにあるのだ。ここでいうコミュニケーションというのは、あらかじめもう共通のコードがあつて、そのうえにのつとてなされるようなものではなく、それ以前の、まさに異質な存在同士が初めて遭遇するようなときに出来るものであり、

極端に言えば、個々の人間存在を根源的に隔絶させているものを越えんとする行為なのである。個々の存在を絶対的に隔てている深淵、それは通常は慣習と惰性、制度や教育のなかでほとんど意識に上らないものとなつてはいるものの、時としてほんの束の間であれ、我々に自らの体験の絶対性とその孤独を味わわせるような、他者との間にある断絶のことである。そして言語芸術に自らの使命を見いだすものにとって、この断絶は言語による伝達という手段を脅かすものであり、同時に言語という共有された規則の欺瞞性を暴くものでもある。ホーフマンスタールを先駆けに、この時代に沸騰した言語への懐疑と危機意識とはこのことである。ムージルは認識とその伝達に横たわるこの根源的な危うい関係に注目しているのであり、それがまさに彼の詩人としての問題にほかならないからだ。コミュニケーションを成立させるためには、そしてそこにおいて意味が発生するためには、コミュニケーションを阻害し、拒絶する他者がまず必要とされるのであり、 $A_1$  が果たす機能はそこにある。そして神秘は、忘我体験はそのような拒絶を生じさせるものとして、そしてこの存在間の深淵を回復させるために、それ自体価値がある現象や出来事としてではなく、まさに方法として、『黒つぐみ』で案出されたのである。 $A_2$  自身みずからの体験の意味を知っているわけではなく、それが意味をもつためには、まず $A_1$  との間コミュニケーションが成り立つことが先決なのであり、この物語ではその前提条件としての他者の存在のみが示されているだけである。黒つぐみの記号性は、 $A_1$  にコミュニケーションされて初めて意味を獲得するのであり、その意味というのは他ならぬ $A_2$  にとっての意味でもある。言い換えれば黒つぐみという記号は意味を獲得する寸前にある。あるいは $A_2$  の方がむしろ黒つぐみの、すなわち彼自身の体験が $A_1$  に伝達されることを怖れているのかもしれない。伝達され、意味を獲得したとたんに硬直してしまう存在の不思議を何度も語っていたのはムージル自身である。

## 注

- (1) Vgl. Benno von Wiese: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Interpretation. II. Düsseldorf (Bagel) 1962. S.304f.
- (2) Vgl. Krotz, Friedrich: Robert Musil. Drei Erzählungen. 2. Aufl. München (Oldenbourg) 1976, S.12 f.
- (3) 本論文ではムージルの『黒つぐみ』 („Die Amsel“)からの引用はすべて次の版による。  
Robert Musil. Gesammelte Werke in neun Bänden. hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek (Rowohlt Taschenbuch) 1978, Bd.6

たとえば次のような $A_2$  の発言がある。「ぼくが君にこの話をしているのは、それが本当かどうか知りたいためなんだ。」 S.553f. あるいはこうも言っている。「それにもしぼくにその

意味がわかっていれば、おそらく君に話す必要なんかもととないだろう。」 ebd. S.561

- (4) Barthes, Roland: Les suites d'action Dans: L'aventure sémiologique. Paris (Édition du seuil) 1985, p.212
- (5) A<sub>2</sub> が自分の不思議な体験を話すようすを「思い出のつまった袋を友人の前にぶちまけ、そうして空になった麻袋をもってそのまま去っていくようだ。」とこの物語全体の語り手は描写している。 Musil, a.a.O., S.549
- (6) Vgl. 「しかし『黒つぐみ』の独自性は語られている内容よりも、どちらかといえば語りの構造のなかにあり、内容はその位置価値を、そして構造を考慮しなければほとんどつきとめることのきかないような意義をそこからはじめて獲得するのである。」 Eibl, Karl: Die dritte Geschichte. Hinweise zur Struktur von Robert Musils Erzählung „Die Amsel” In: Robert Musil, hrsg. von Renate von Heydebrand, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1982, S.412–433, hier S.412  
「すでに述べたテーマははっきりした形で現われているが、それと並んで語りのテーマも暗示されており、・・・」 Arntzen, Helmut: Musil Kommentar sämtlicher zu Lebzeiten erschiener Schriften außer dem Roman 《 Der Mann ohne Eigenschaften 》, München (Winkler) 1980, S.147
- (7) Eibl, a.a.O., S.422f.
- (8) ebd. S.423
- (9) Barthes, Roland Analyse structurale à propos d'actes 10–11. Dans: L'aventure sémiologique. Paris (Édition du seuil) 1985, supra, p.297. バルトは同じ箇所、テキストに書かれていることを自然なものとして受け取るのではなく、それに抵抗し「頭のなかで入れ替えテスト(épreuve mentale de commutation)」を行なわねばならないと言っている。つまり実際のテキストを構成している諸要素を削除したり、別のものと入れ替えてみたりして、その効果の違いを検証し、もとのテキストの構造を見極めようとするのである。
- (10) Roth, Marie-Louise: Die Amsel. Ein Interpretationsversuch. übersetzt von Stefan Jullian. In: Robert Musil— Literatur, Philosophie und Psychologie. hrsg. von Josef und Johann Strutz. München-Salzburg (Fink) 1984, S.173–186, hier S.175
- (11) Baur, Uwe: Musils Novelle „Die Amsel”. Figurierung der Persönlichkeitsspaltung eines Rahmenerzählers. In: Vom Törleß zum Mann ohne Eigenschaften. hrsg. Uwe Baur und Dietmar Goltschnigg. München-Salzburg (Fink) 1973, S.237–292, hier S.270
- (12) Musil, a.a.O., S.549
- (13) ebd. S.553f.

(14) ebd. S.562

(15) 岸田 秀： 擬人論の復権〔ものぐさ精神分析（中公文庫）1982,156～172頁所収〕159頁

(16) 柄谷行人： 探求Ⅰ（講談社）1980, 9頁参照。これは独我論を排するために、柄谷が「他者」に対してほどこした定義である。その場合独我論というのは、「私独りしかないという考えではな」く、「私にいえるとは万人にもいえると考えような考え方」だという。その例として、コミュニケーションに際して共通の規則を前提としないような相手、たとえば外国人、子供、精神病者をあげている。